

真言密教における性差 ―修行論を中心に―

北川 真 寛

要旨

周知の通り、弘法大師空海（七七四―八三五。以下、空海）は密教の根本道場として高野山を開創したが、明治期まで女人禁制の場であった。密教においては『理趣経』をはじめとして、いわゆる「煩惱即菩提」を説く経典も存在するが、空海はあくまで戒律を重視し、修行道場における男女隔離を徹底している。

一方、密教経典や論書では、性差を超えた「内心の大我」のあり方や、男女を区別することなく灌頂を重視する姿勢も説いている。空海自身も「虚空尽き、衆生尽き、涅槃尽きなば、我が願いも尽きん」（『性霊集』）と述べるように、一切衆生の本質をさとらしめるために即身成仏や十住心思想、実践行としての三密行などを説き、自身が唱えた密教の定義づけを行った。それにつながる真言宗の教えは伝統的に東密と呼ばれ、現在では真言密教とも称されている。

そして空海以後、東密では天台宗の密教導入、さらには鎌倉期を中心とした新思想の興隆などによって、広く諸宗の教義から空海の思想を追い、さらには同時代的な問題に対応させることとなった。そのたとえば高野山（南山）では、特に室町期の応永年間に山内子院である宝性院の宥快（一二四五―一四一六）、さらに無量寿院の長寛（一二四〇―一四一六）という二大学匠が登場するに及んで、それぞれ宝性院の一派を宝門と称し、無量寿院方が寿門と呼ばれて、両門は互いに南山教学の研鑽に励んできた。そこでは諸宗の教学と真言教学、あるいは真言密教の諸流派や諸山の法門の義理を問答によって分別する「論義」、あるいは「談義」や「堅精」などが盛んに行われていて、論義や堅精は一定の形式による法会として儀式化され、現在の高野山でも「問講」として盛んに続けられている。

その中には『一乗経劫』などの多くの論題が残されているが、例えば『闡提得度』の論義は、成仏を否定された一闡提や声聞・縁覚の二乗を済度することが実際に可能か否かを論じる算題である。また『宿善有無』では、過去世の善根が、今生での即身成仏にどのように影響するかが論じられるなど、真言密教独自の見解も論じられている。

また即身成仏のための修行実践に係る論義として、『三密双修』がある。『三密双修』は、興教大師覚鑠が提唱した一密行や二密行を、三密行に比して行体として認めうるか否かを論ずるものである。さまざまに問答を重ねていく中で、無性闡提をはじめとして当時機根の劣るとされた人々の即身成仏が問われ（問題とされ）ている。この中で、身体的な障害を持つ人々や、現代で言えば性的マイノリティ等が論じられていて、机上の空論としての議論ではなく、現実的な問題として機根の劣るとされた人々の即身成仏が問われているのである。